

# 万象点描



農的社会デザイン研究所代表 蔦谷 栄一氏

## 共同軸に自給度高めよう

よもやの激震が熊本地方を襲った。被災された方々に心からお見舞いを申し上げる。

震源は100キロ程度の範囲に広がり、その延長線上に中央構造線と呼ばれる断層帯が存在するため、東の愛媛県、さらには西日本への拡大が懸念されている。どこでもいつでも大地震は起こり得るとの認識を基本に「災害列島」であることを前提にした国づくりが必要なようだ。

こうした折に、木村快氏の脚本・演出による『遙かなる島』という合唱構成劇のDVDを見た。熊本地震の後に立ち寄った東京都小金井市にある特定非営利活動法人(NPO法人)・現代座で、代表である木村さんから「ぜひ見

### ■「災害列島」の備え

ろ」とDVDと関連する資料をいただいたものである。

『遙かなる島』は1983年が初演の青ヶ島を舞台にした作品である。八丈島から船で3時間、伊豆諸島最南端に浮かぶ絶海の孤島で、住民は200人弱(当時)。1785年の大噴火で全員が八丈島に避難して「全滅」したものの、1824年に全島民が帰還を果たした歴史を持つ。

漁業と農業が主たる産業かと思いきや、周りは日本でも有数のカツオの漁場でありながら、島は絶壁に囲まれて港がない。よそから集まっていく漁船がカツオを獲っていくのを指をくわえて見ているしかない。土壌は火山性で地味が悪い。ため大した農産物もできず、食料の大半を島外に依存してきた。

ところが離島振興法による公共事業で道路整備や発電所建設などの工事が相次いで行われるようになり、これに伴う現金収入で自動車や家電製品が普及し近代化が進行してきた。その横で農地は荒れるに任されてきた。

ここで復興を目指すという話である。

木村さんは資料で「いずれこの国の文化は、この国の自然ともう一度しっかりと向き合って考え直さなければならぬ」というのが来るのではないだろうか。そう考えた時、近代化の矛盾の中で途方に暮れている島の生活は、実は私たち自身の現実であり、未来なのだと思わざるを得ない」と述べている。まさに現在の日本の姿そのものの予言と言える。そして金を投入しての土木工事に偏りがちの復興に疑問を呈するとともに、復興の前提には地域での徹底した話し合いと、共同しての活動が欠かせないことを示唆している。

この「災害列島」に原発はなじまない。共同を軸に地域コミュニティを再生し、農地など地域資源を活用したFDC(食料・エネルギー・福祉)の自給度向上が必要だ。